

大阪 ■ ■

No.43 2011.1.22.

大阪哲学学校運営委員会 Copyright©, 2011

哲学学校

【郵便振替】 01170-1-81313

【E-mail】 oisp@mac.com

【Home Page】 <http://oisp.jp/>

【代表者】 山本 晴義 (校長)

【発行者】 平等 文博 (運営委員長)

【編集者】 平等 文博

【連絡先】

657-0037 神戸市灘区備後町 5-3-1-1001 平等気付

電話 & FAX:078-856-2474

■ ■ 通信

21世紀と「多極化」の時代

「パクスアメリカーナ」の崩壊

山本 晴義 (校長)

迎春

新春を迎えましたが不況と政局混乱であまり目出たい気分は生まれません。しかし今年は大阪哲学学校発足25周年です。なんとよく長くつづいたなあと楽しい気分があふれます。時代の背景により会場があふれた時も、2、3人で激論したこともありましたが、いったい老若男女何人の友人、つながりができたことか。今年もよろしく願います。

なお昨年末、実に精力的に哲学学校のいろいろの世話をしてくれた中村徹さんが急逝されました。心から哀悼の意を表したいと思います。

「通信」42号の拙論「デューイとニューディールとオバマ」の続きですが、今回は対話方式にしました。Fというのは友人、Hというのは私です。

ー

H 私はいま、2009年の夏、鳩山政権が成立したあの政権交代の時、誰と会ってもどの

研究会に行っても、皆のいきいきした顔や声に出会ったことを忘れません。「コンクリートから人間へ」「いのちを守りたい」「新しい公共を」「普天間基地を県外・国外へ」……。いままでの首相でこれ程高い理念を掲げた人はいなかったのではないかと議論しあいました。

F あなたは昨年1月16日の「通信」で2009年1月、熱狂的に支持されてアメリカ大統領に就任したバラク・オバマが「リーマン・ショック」の中で「チェンジ」を叫び、「21世紀のニューディール」「グリーン・ニューディール」を目指し、4月ブラハで訴えた「核兵器のない世界」を歴史的だと評価しましたが、鳩山政権に対してもそのような共感をもったんですか？

H そうです。オバマの目標は、レーガンに代表されるグローバルな「新自由主義」=戦後の「パクス・アメリカーナ」「フォーディズム」の行きづまりの中で80年代から強行した福祉の削減、徹底した規制緩和、市場万能主義、資本の大幅減税、格差の拡大とブッシュのイラク

戦争に象徴される単独行動主義、先制攻撃主義、一国覇権主義の結果、2008年9月、米証券大手リーマン・ブラザーズの破綻による世界経済の金融危機、「ドル時代の終焉」からの脱却です。

F けれども昨年11月のアメリカの中間選挙で、オバマ—民主党は敗北しましたね。その背景は？

H はい。オバマは就任以来これまで、30年代フランクリン・ルーズベルトが「ニューディール」でやった医療保険改革と金融規制にとりくみました。前の「通信」で言ったように、子の改革に対してルーズベルトも大資本から、さらに最高裁から攻撃を受けましたが、現在では法案を葬り去ろうとする巨大な民間保険会社、巨額のテレビコマーシャルやロビー活動（議会工作）、例の「ティーパーティー」と名づけられた、中心には黒人大統領に反対する保守的白人層やネオコンがおり、オバマを社会主義者だとあおる全国的なウォール街の法案つぶしがあります。

それに今でもブッシュが残した二桁の失業率、国民の7人に1人が食糧配給切符で食いつないでいる貧困と格差があります。

またイラク撤退と同時に、国民の過半数が反対するアフガン戦争継続を主張し、新型核搭載爆撃機の開発を表明する矛盾もゲーツ国防長官はブッシュ政権からの横滑りであり、リン国防副長官は軍需産業大手レイセオン社の上級副社長で08年夏までロビー活動をしていたということを見落としてはなりません。

法案は妥協の産物になってゆく。

F では現在、アメリカのオバマ大統領の闘いは世界の流れの中でどのように見ればよいのですか？

二

H はい。ボストン大学のアンドリュー・ペースピッチ教授は、たしかに第二次世界大戦直後、アメリカは世界の工業生産の3分の2を占め、大阪哲学学校通信 No43

「パクス・アメリカナ」が発展したが、現在ではもはやその地位を失い、21世紀は「多極化の時代」であり、アメリカはその重要な一極に過ぎないことを、もっと政治家・軍人のみならず国民の深層心理の中でも認識すべきだと述べています。

彼はその原因がベトナム戦争以来、イラクやアフガンまで、国の財政には限りがあるという当然の前提が無視され続けた負の蓄積による今の国力の衰退にあることを指摘しています。オバマ政権がブッシュ大統領から引き継いだ財政赤字は1兆3千億ドルで、アメリカ史上最大の額です。

35年ルーズベルトの場合、プロ・レーバ的な第二次ニューディール政策を遂行し、36年、大差で再選されましたが、ヨーロッパやアジアの戦争に巻き込まれることを避け、36年から3年間、孤立主義的な「中立法」を制定しました。

F 「多極化の時代」。まさにそのとおりだと思います。中国、インド、ブラジル、ロシアなど新興国の発展、新しい国際秩序のための「G20」を見ても理解できます。

H 外部に仮想敵を持つ軍事同盟に代って、外部に開かれた平和の地域共同体が世界各地で発展している。東南アジア、中央アジア、アフリカ、ラテンアメリカなど地球的規模での平和のネットワークがつけられつつあります。

私は現在、日本は憲法9条を持つ国として、アメリカ一辺倒から抜け出してアジア諸国との平和の関係を、とりわけ北東アジアにも押し広げなければならないと考えています。だが菅政権は、鳩山政権が政権交代で掲げた反自由主義、反軍事大国への歩みを、軽々と裏切り、「日米同盟の深化」、憲法違反の自民党もやらなかった「武器輸出三原則」の見直しなどの軍事強化や国民生活破壊の新自由主義政策を強行していることを、はっきり認識する必要があります。これについては、次号の「通信」で私達の課題とともに述べたいと思います。

会 員 短 信

《中村 りょう子》

2011新春

昨夏は猛暑、今年は新雪、「浄められたい」という思いが一入です。

現世も自身の体も、しばし、お借りしている「時間」と「モノ」でありましょうか？

私達が、田畑氏夫人と中村徹氏を喪いましたのは不意でございました。

昨年二月、「シナイ山」山頂2280m余へ登ることができました。

「文学」に接しながら、【新旧約聖書】を素通りしたまま、人生を終るのは途方もなく、口惜しいが、諦めて、硬く蓋をし、駆け抜け、逃げる心算で居りました。

これも不意の事でしたが、【聖地巡礼】の旅、2週間余に恵まれました。(当然、新旧バイブルはついに覚悟して、読み驚き、繰返し、触れます)

「哲学」は私には「大阪哲学学校」を介して親しみました。

昨年七月、転居し、所有物の3分の2を捨てました。

その廃棄物の中から不意に【グライマイエスを語る】という本が現れました。

此れも、本当に驚きをもって、読み終えました。私の感触では、【仏教】には、哲学が底知れぬ深さで扱られているようで、畏怖を覚えます。

【聖書】には歴史を感じます。

上記の「困惑」は抱いたままで、今年は、一日、一日、耳を清まし、目を凝らして暮らします。

*折角の22日「新年会、総会」、1月18日より【アメリカ東海岸】ボストン、ワシントン、ニューヨーク、シカゴ 旅します。

参加できません、残念でございます、皆さまに良い一年であります様にとお伝え下さいませ。

《松田 博》

近刊のお知らせ

「歴史の周辺で—グラムシ『サバルタン・ノート』注解」を3月に刊行予定です(明石書店)。

2009年に『獄中ノート』原本の完全復刻版が刊行され、『獄中ノート』グラムシ研究所校訂版(1975)でも明確でなかった疑問点の大半が明らかとなり、本書においても活用しました。

イタリアではグラムシ全著作のナショナル・エディション(国家的事業としての「全集」版)の刊行が開始され、グラムシ研究の新たな発展が期待されますが、原本復刻版はそれに先行するものであり、わが国を含む世界のグラムシ研究が「校訂版」段階から「校訂版プラス原本復刻版」段階へと移行していくものと楽しみにしているところです。

またグラムシ「サバルタン・ノート」への関心も徐々に広がりつつありますので、この点でもサバルタン研究とグラムシ研究との交流、連携が深まる可能性がありますので、2011年はこの点の掘り下げを重点課題とするつもりです。

また季報『唯物論研究』115号では「グラムシ生誕120周年特集号」に取り組んでいます。若手研究者を含む各分野の研究者が10名以上寄稿していますので、感想やご意見を寄せていただくようお願いいたします。

《井口 昇司》

近況

健診で胃内視鏡検査受診の指示を受けました。結果は異常なしでしたが、その間いろいろな心配したり考えたり。

今は二人に一人が癌になるといわれているようですから、当たっても不思議ではないんですが。

*当日所用のため参加できません。すみません。

さらば！ 中村 徹さん (本校運営委員)
2010年12月4日逝去 享年63歳



新年交流会にて (2007年1月27日)



中村君について思い出すことども

木村 倫幸

かれこれ半世紀近くも昔のことになりますが、昭和40年(1965年)に大学に入り、当時鷺田小弥太さんがチューターをされていた哲学研究会(哲研)というサークルに所属していました。ちなみに、唯物論研究会(唯研)のチューターをしてもらったのが田畑稔さんです。

次の年に哲研に顔を出したのが、法学部生だった中村徹君です。当時は正統的な思想といえばマルクス・レーニン主義で、そのための基本的な文献を読んで議論するのが哲研の活動で、ポリティケルの『哲学入門』、プレハーノフの『歴史における個人の役割』などをやったものです。

中村君は最初どこかすねたような態度で、いわば斜めに構えるという雰囲気に参加していました。後には活動に馴染んで熱心にやっていたのですが、彼にはいつも何かしら、取りとめもないような大胆さ^{らいらく}とか、磊落さ^{らいらく}のようなものが付きまとっていたのを記憶しています。

当時の学内は、生協問題やベトナム反戦運動で高揚しており、いわば大学の改革闘争の前哨戦のようで、それこそデモに行つて当たり前、集会はほぼ連日というような状況でしたが、彼はその直前の1970年に卒業就職ということで、その後しばらくは連絡もない状態が続きました。

そしてとにかく驚いたのが、哲学学校に出て見ると、今まで見たことのない柄の悪そうな坊主頭が坐っていた時のことです。どこか記憶にあるようなないような感じで見ていると、向こうから「木村さん、久しぶりです。中村です」というドスのきいた声で挨拶されました。「ああ、これはまた……」という感じで、思いがけなく中村君との再会があったということになります。全く20年以上も音沙汰なかったのが、突然つながったのには正直言ってビックリしました。

その後は皆さんもご承知のとおりで、哲学学校や季報・唯研での活躍ぶりや飲みっぷりは、まだまだ鮮明な記憶として残っています。

特に最後の時期の中村君は、これらの活動に生きがいを感じていたようで、何かしら昔の学生時代の活動を思わせるところがありました。逆に言えば、若きころの思いが、人生の経験を身につけた後でも、まだまだ燃え続けていたということでしょうか。酒を酌み交わす時の議論などは、学生時代の議論のようで、実に楽しく飲ませていただきました。私はもっぱらビール党ですが、ときに焼酎を飲むと中村君を思い出してしみりしてしまう次第です。ご冥福をお祈りいたします。(2011. 1. 17.)

「くたびれ儲け」人生

高根 英博

中村さんには、私もいろいろとお世話になりました。

特に、生活面でアドバイスやお叱りを受けたのですが、うまく応えられませんでした。

本当に面倒見のいい人でしたから、復帰を待っていたのですが……。

思うに、なぜ大阪哲学学校や季報「唯研」の面倒をみようとしたのか、不思議ではありません。あまりはなばなしい分野ではないのに、と。逆に苦労を買って出ることになったようにも思うのですが、でも、いつも楽しそうにはされていきました。色気もない世界だったと思うのですが。意外とマジメだったのでしょうか。でもマジメに哲学に取り組んだとも思えないのですが。でもでも彼にとって貴重な何かがあったように思います。そういう意味では有意義な晩年の生き様(よう)だったかも知れません。

私の好きな禅者だった市川白弦のお気に入りの生き方の格言は「骨折り損は、くたびれ儲けで償うべし」ですが、中村さんもその格言に対して「そんなかなわんわ一つ」といいながら、「くたびれ儲け」人生に、笑つてうなずいてくれるのではないかと確信しています。

さようなら、中村君

佐野 米子

中村君（学生時代からの呼び方ですのでお許しください）とは、大学1回生のときからの友だち・同志でした。学園闘争が盛んだっところ、C棟控え室という場所は、学部を越えて同じグループの学生が賑々しく集まる場所で、中村君はいつ行ってもそこにいたような気がします。

あれは卒業直前（直後？）、デモで久々に彼に会って某大企業に就職が決まったことを知り「良かったねえ」と話をして駅で分かれてから40年、会う機会もなかったのですが、ひょんなことで哲学学校の運営を手伝っていらっしやることを知り、部会でもお会いしました。40年の歳月も彼の優しく朗らかな人柄と「男前」を変えることはありませんでした。

ちょうど4年前、私の住む堺市で若い新人市会議員候補の応援を買って出られた（きっと頼まれて意気に感じてのことでしょう）ときにお会いしたのが最後になりました。

2～3年前にボジョレーヌーボーの試飲パーティーにメールで誘っていただいたときに、予定があつて「来年また誘ってね」とお断りしたのが今となればとても悔やまれます。

同じ年の仲間が逝ってしまうのはこれが最初です。とても寂しいけれど、あらためて自分自身も有限な存在であることを実感しました。

中村君、そちらで再会する日まで（唯物論者なのになんちゅうことを！）もう少しこちらでやり残したことをしていますね。

それまで、さようなら。

中村 徹さんについて

やすい ゆたか

中村さんのやる気と明るさと心配りで随分助かっていたと思います。ワリカンのときも心遣いしてもらって感謝しています。いないと空洞感が大きいですね。

大阪哲学学校通信 No43

中村 徹氏追悼

村山 章

私が「破傷否傷弥 亭」こと中村徹さんに出会ったのは、21世紀研究会が発足したころだったと思います。

あところから研究会の後の飲み会が、やけに明るく賑やかになりました。そして、終電ぎりぎりまで、大阪駅のオデン屋で飲んで語り合った記憶は鮮明です。

私にとっては人生の転機ともなった、21叢書発刊の遂行にあたって、中村さんが果たされた貢献は計り知れないものがあります。

知らせを聞いて名古屋から大急ぎで駆けつけた通夜、そこには、あの朗らかな中村さんの素晴らしい遺影がありました。本来ではありえない「献杯」ならぬ「乾杯」が至極自然にマッチしていました。

色々お辛いこともあったかもしれませんが、それでも振りまいてくれた朗らかな笑顔の記憶は、私たちにとって貴重な財産だと思います。

さようなら中村さん

西山 寛

哲学学校運営委員の中村徹さんが亡くなった。突然の訃報に私は啞然となってしまった。私よりひとまわりほど年上ではあつたがまだまだ若い中村さんのこと、にわかに信じることができなかった。享年63歳とのこと。本当に残念である。

中村さんとの出会いは今から8年ほど前になるが何でも大手の会社を早期に退職されての哲学学校への参加であつた。学生時代に運動の経験があつたとのことで、きっと大学を卒業してからも胸にきするものがあつたのに相違ない。燃えるような眼差しで一心不乱に研究に打ち込んでおられた姿を今も忘れることが出来ない。

度重なる病の不幸と闘いながらの学究生活であつた。満身創痍になりながらもあきらめることなく学問を究めようとされていた矢先だけに

哲学学校は貴重な人材を失うことになってしまった。

中村さんは一見、豪胆な人柄のように見えていたが非常に気配りの行き届いた人でもあった。哲学学校会員のやる気を喚起するための叱咤激励は、先の見通せない昨今においてみんなのやる気と向学心を鼓舞する結果となった。また、信貴山での夏合宿、勉強会では病の身をおして参加者と行動を共にする、車の送迎をかってでるなど、方向音痴の私などは終始中村さんのお世話になるなど、本当にやさしい人であった。

常に前向きな姿勢で頑張っておられた中村さんの思い出を胸にのこしながら私もこれからの限りある人生を精一杯生きていきたい思いで一杯である。

さようなら中村さん。すばらしい思い出をありがとうございました。

中村 徹さまへ

義積 弘幸

ご病気だったことは知っておりましたが、亡くなられたことは、大阪哲学学校だよりで、初めて知ったような次第です。

私事になりますが、実は私は、中村さんに謝らなければならぬことがあったのです。それは、哲学学校創立20周年の講師として誰を呼ぶか（この計画自体、私の早とちりな思い込みだったのですが）を考えた私は、吉本隆明氏がいいのではないかと思い、中村さんにメールを送ったのです。問題は、その時、私はものすごくハイテンションで、返事が来ないのをいいことに何回も同様のメールを打ち続けたのでした。

私は、その時から、自分をコントロールできなくなって、遂に半年ほど入院することになりました。退院後、そのことを謝らなければならぬと思ったのですが、名刺を無くしてしまって、連絡がとれなかったのです。ある人から、「君が、そういう状態になりうると知っている人だから、わざわざ謝らなくてもいいよ」といわれ

たので、そのままにしていました。それからしばらくして田畑さんから、「中村さんは病気で車椅子生活をされていて、例会には来られないんだよ」と告げられたのです。「しかし、それでも元気だから……」と付け加えられたので、いつか会えると楽観視していたのです。けれど、もう謝ることができなくなってしまいました。どうしようもなかったといえば、それまでなのですが、今でも、魚の骨が、のどに刺さったような感じがするのです。あの時の事情を話し、謝罪することが、私の義務だと思うので……。

だからこれは、ずっと私の心に残ったままなんだなあ、と今、思っています。他人には些事と思われるかもしれませんが、私には、どうしようもなく残っているのです。何かつらいですね。その記憶は、消去できないまま、残された荷物のように持っているのだなと感じているところです。

今度は、中村さんとの良い思い出です。

私は、兵庫県丹波市から尼崎まで、普通電車では時間がかかりすぎるから、特急で通っていたのです。福知山線は、1時間に1本です。そんな時、一緒に食事をしていても「もう時間やで」と言ってくださいました。有り難かったです。うれしかったです。あの声は今も心に残っています。あの声が聴けないのは、なんとも悲しいです。

もう一つ、貴重な言葉があります。それは、勤めておられた時の体験から生まれた、「営業は百件行って一つ取れたら御の字だ」という言葉です。私は、教員の世界しか知りませんから、そんな苦勞などまったく知りませんでした。今、52歳になっても忘れられない一言です。体験から出た重い言葉だと思います。

最後に、中村さんの哲学学校に対する貢献はすごいものでした。それは、どちらかといえば、縁の下の力持ち的なもので、地味なものでしたが……。これも忘れられません。

これを書いて、タバコを吸いに、外へ出ると、

星が一つだけ輝いていました。これって中村さんの魂？と思われました。私はどの宗教にも入っていませんが、ふと、そう思えました。

中村 徹さん追悼

宮前 泰雄

中村徹さん。こんな形で文章を書くようになるとは思いませんでした。中村さんには大阪哲学学校に来られるようになってから、お世話になりっぱなしでした。中村さんと私は、同じ時期に同じ大学で過ごしたようで、大学紛争で機動隊が導入された時のことなど、共通の話がありました。あまり話をしませんでしたけど、中村さんは哲学学校の時などいつも私のことに気を使ってくださいました。夏の合宿が京都のお寺であったとき、私は調子が悪く一泊して翌日の朝に帰るようになったとき、飲み物や食べ物を買ってきて渡して下さいました。

私が中村さんの病気のことを知ったのは、尼崎労働福祉会館でした。いつだったか覚えていませんけども、たぶん三階のソファでねていると、もう一人のひとと中村さんが話をしておられました。膀胱癌という言葉が中村さんから出たとき私は息のみました。

それが中村さんの病気を知った初めでした。

この12月に中村さんがなくなったこと、葬儀の場所を田畑さんから連絡があったのですが、私が見たのは一週間くらいたってからでした。私は、季報『唯物論研究』の一〇九号に投稿された中村さんの「大変でした、今も大変です－腹部動脈瘤手術の経過」を読みました。中村さんに追悼を捧げたいと思います。

感謝の気持ちも伝えられず……

井口 昇司

中村さんが逝去されたとのこと、驚いております。詳細存じませんが、長らくの闘病だったのではないのでしょうか。

田畑フェチだと言っておられましたが、学校大阪哲学学校通信 No43

での発言は予習を十分しておられる様が窺え、落ちこぼれみたいな私は少しうらやましいような感を抱いた記憶があります。

哲学学校の運営にも平等委員長等に協力、尽力されたのだと思います。

恩恵に与った私としては、感謝の気持ちも伝えられず、悔いが残ります。

非まじめのススメ

平等 文博

「まじめでも不まじめでもなく、非まじめ」—これが「^{はげひげ}破傷否傷弥 亭 徹」こと中村徹さんが常々言っておられた人生の流儀です。大柄でちょっとコワイ風貌が破顔一笑、いたずらっぽい笑顔と身振りで彼に話しかけられると、思わずこちらも無防備になって応じてしまう、人の心を開かせる天性の魅力を持った人でした。

「めちゃんこオモロイわ～」とくだけた口調ながら、しゃべる内容は政治に哲学、思想。定年を待たず退職し、自由な時間を手にしてからの中村さんは、「人生の空白」を埋め合わせようとするかのように精力的に行動されていました。

初めはご自身の気のむくまま、田畑さんや私の講義も聴講に来られましたが、やがて京大の大学院の授業に顔を出すようになってからは、有望な若手研究者の成長を楽しみに、彼らを世に送り出すべく心を砕いておられました。

昨年11月も終わり近く、「哲学学校の口座に年会費とカンパを振り込んだから確認して」と中村さんからメールが来ました。入院しているけれどもまもなく退院予定とのことで、短いメールを2、3やりとりしたのですが、長年お母さんを自宅で見ておられた経験から、最後のメールは、似た状況にある私を気遣う優しい言葉で締めくくられていました。その後、予定通り退院されたと聞いて安堵していましたのに……。

お好きだった谷村新司の「さらば～昂よ」に送られ旅立った中村さん。「オレの人生、むっちゃんこオモロかったわ」と聞こえた気がしました。

クローン

上野山定由（会員）

部屋全体が大きな一枚の鏡

こちらを向いて 立っている私が写っている

私は 訪問客のための飲みものを持っているし

写っている私は 両腕を垂らしていて 服装もちがう

彼は私のクローン 一瞬の錯覚に苦笑した

むかい合っていると 日ごろ背後に押しやっていた

見たくない私と 否応なしに 顔をつき合わせていて

はなしを交わしても 独り言に自分で相づち打っているようで

世間話を二、三すると 黙って目を逸らしている

気まずさを追い退けるかのように クローンは喋りだした

人は よく孤独を嘆いています

一人として 同じ顔をしていません

心もそれぞれ 日常の暮らしではともかく

ちよつと込みいった話になると通じない

誰も彼も 異なつた太陽を仰いでいるのです

だが 私たちクローンは

貴方とおなじように考え同じように感じていますので

わかりきつた話をと 欠伸をかみ殺しておられる
仕方ありません あなたの写しである私は
ご存じのことしか 話せません

これからは お目に掛からないようにします

貴方だけではなく 仲間のクローンにも

お会いして 味気ない思いをするよりは

私とは 理解しあえない人々のなかに入つていつて

いらだつたり 孤独を嘆いたりする方が

どれほど 宜よろしいことか



画家ムンクと香川進

ふびと
泉 史 (会員)

(敬称はすべて略。歌の頭の数字は便宜上つけたもの)

ノルウェーの大画家ムンク Edvard Munch (1863年～1944年) についての歌が2首、香川進にある。

- 1、橋くぐる船にし立てば黒々と
しむらムンクのごとき闇あり
- 2、ムンクの絵の鳥よ羽触れしろがねの
柔らの花卉のつぶさつぶさに

ともに『湖の歌』(昭和五十九年1984年刊行、香川七十五歳)にある。

香川がなぜ、ムンクを知っていたのか、と言う疑問の、或る答がある。

香川の師の前田夕暮にムンクの歌がある。

- 3、ムンヒの「^{りんじゅう}臨終の部屋」をおもひいで
いねなむとして夜の風をきく
- 歌集「生くる日に」(大正4年1915年、白日社刊行)

「ムンヒ」は、Munch を、ドイツ語読みしたのである。ムンクが自身の姉ソフィーエの「臨終の部屋」を描いたのは1892年ころ、150×167・5 cm、カンヴァスに油彩。他に鉛筆(1893年)、木炭(1892年)、リトグラフ(1896年)がある。

夕暮の歌の制作年は、大正二年(1913年)と「前田夕暮全集、第2巻歌稿」よりわたくしが推定した。(当時、ムンクは1913年(五十歳)、ニューヨークで<吸血鬼><マドンナ>などの版画を出

品している。)

歌稿を見れば、歌の内容は変わらず一か所ひら仮名が、「思」と漢字になっていた。歌集にはないが、歌稿によると小題、「暮鳥とのむ」とあり、3首のなかから1首のみ歌集に抽いた。歌集には題がない。この暮鳥とは、キリスト教伝道師兼詩人の山村暮鳥であろう。それは、山村暮鳥の第三詩集『風は草木にささやいた』を前田夕暮の白日社から大正七年(1918年)刊行しているから。歌は1首のみでありわたくしの想像では、酒屋で酒を飲みつつ画家ムンクを教えたのは山村暮鳥ではないか。というのは、夕暮の好む画家は、カンデインスキーとゴッホ、セガントイニ、ピサロである。

ところで、戦前、ムンクはどれだけ人々に知られていたのか。

一握りの人であろう。1933年1月、ドイツでヒトラーが内閣を組閣した。1937年にナチスは、ドイツの美術館が所有していたムンクの作品82点を「退廃芸術」として押収した。当時、ドイツびいきの雰囲気は国中に横行していた日本ではムンクの作品を見るのみならず、語ることもたいへん難しい状況だった。1911年におそらく日本で最初のムンクを雑誌『白樺』の第二巻第六号で「エドヴァード・ムンヒ」(挿絵に就いて)とムンクを紹介した武者小路実篤は、昭和十一年(1935年)四月から渡欧し、十二月十日に帰朝した。がこの渡欧に、パリ→ベルリン→アムステルダム→ハンブルグ→コーペンハーゲン→オスロ→ストックホルム→ベルリン→・・・マルセイユと北欧のノルウェーのオスロへ行きつつ、イプセンやビョルセン、ヨナス・リー、キーランドなどの文学者の墓に詣でたり、オスロの美術館を訪れながら、「それ

にオスローでは他に特色がないせいか、文學者をしきりに大事にしてゐる」(『湖畔の畫商』)と奇妙なことにムンクについて無関心であり、昭和十五年の渡歐紀行にも敵意に近くまったく口をつぐんだ。おなじ昭和十五年(1940年)に、ドイツ軍がノルウェーに侵攻したが、反ナチの気分のあつたムンクはナチスとの接触を避けアトリエのあるオスロー郊外のエーケリーとヴィトステーンに暮らし、1944年ムンクはエーケリーで八十歳、独身のまま逝去した。遺言により、全作品がオスロ市に寄贈された。

現在では、中学校・高校の教科書にムンクが掲載されており、ムンク展は大勢の人々が観にくる。それは日本だけではなく、戦後のアメリカ・ヨーロッパにおいて同じである。

香川は、昭和六年(1931年)、「白日社神戸支社」を興すにあたって許可を得るために上京して前田夕暮に会ったはずである。ここからは、小説の筋みたいだが、出会った夕暮は、香川の境遇を聞き、香川を励ますため、香川のような幼い時に母を亡くして大芸術家になった画家ムンクのことを語り、香川は感激して聞いたであろう。しかし、じっさいにムンクの絵画を観たのは戦後であろう。

香川の歌は、夕暮と出会った青春時代の思い出があり、香川自身歌を作りつつさまざまことが思い出されたのではないか。

さて、2の歌から見て行こう。画家ムンクの鳥の絵は二種類しかない。ひとつは、スワン(白鳥)①であり、もう一つは家鴨(アヒル)②である。①は、縦長の全体は北欧特有の蒼色が背景で、上半分は一羽の白銀の白鳥、下半分は眉を八字にした三十歳くらいの憂愁にみちた女性。油彩。②は、題『村の通り』、縦長で大きく全体はしろがねの雪景色で、3分の一に分かれ、上部は

村の家とその上の雪雲が青い切れ目を三か所見せ、中央部は村の広場で右手に赤い服のたぶん女性のグループがやや奥に、左に緑や茶色の男たちが近景で、下部に二種類の茶色と黄色の家鴨の群。(1905～1937年制作、100・5×105cm、カンヴァスに油彩)

2の歌の題は「牡丹の花」でさらに小題があり「風」となっている。どちらを、香川は見てどう感動したのだろう。

ムンクの鳥の絵をさがすのにわたくしは苦労した。現在①②とも国外に出ることはない。実際を観るにはノルウェー国オスロ市のムンク美術館しかない。印刷版なら、①は、西日本最大と云われる美術本コレクションを持つ兵庫県立近代美術館図書館(神戸市中央区脇浜海岸通)で英文パンフレットの中から見出すことが出来る。②は、『美術出版社、トーマス・M・メッサー著「ムンク」1974年ニューヨーク、訳匠秀夫』で見ることが出来る。それ以外の画集はやや難か。

難解なのは1の歌の「ムンクのごとき闇」が、なにを示しているかである。

歌にある「ししむら」(肉体)に対応するものは、「こころ」あるいは、「精神」である。「ムンクのごとき闇」は、「心=精神の闇」を暗示する。「心の闇」を引き出したのは、歌の上では「橋くぐる船」である。それとムンクが結びつくものをさがすこと。

ムンクの有名な絵に《叫び》{(1893年、91×73・5cmカンヴァスに油彩)リトグラフ(1895年、35×25cm)}がある。日の沈んだ真っ赤な残照と紫色で描かれた船と湾、棧橋に叫ぶ男と去って行く二人の男。個人の絶望と煩悶を明確にあらわした彼の代表作のひとつである。この構図、フィヨルドの湾と赤い空からなる風景、斜めに配された棧橋の欄干、さらに前景に正面観の人物像という構成は繰替えし制作された。棧橋、大小の船はムンクの生涯のモチーフであ

り、哲学の存在論的構造では不安を隠蔽する。
香川に、棧橋の歌がある。

4 往きし日も還りし日にも姉立ちし
棧橋いまも揺れつつあらん

この歌は、歌集『湖の歌』にある題「棧橋」のなかの1首である。香川は九歳で母と死に別れた。あと一家の中心はお姉さんであったようだ。そのお姉さんが戦争から戻ってきた香川を棧橋で迎えた。棧橋は、香川の生き死の往還の接点であった。ムンクは母を六歳で失い、あと

の一家の人気者だった一つ上の姉を十四歳で失った。この肉親の死を題材にムンクは、四十年以上《病める子供》のシリーズを制作した。ムンクは故国の棧橋から1889年西ヨーロッパに絵の勉強と絵で盛名を得るのために旅立ったひとである。ムンクの棧橋の絵を観た香川には、隠されていた不安を露わに見て他人ごとではなかったと思う。

大阪哲学学校活動日誌 (「通信」42号発行以降)

2010. 1.30. 〈日本思想史講座〉「私の思想史・事始め—狩野亨吉・中井正一・尾崎秀実ら」(2)
.....講師・鈴木 正
- 2.13. 〈日本思想史講座〉「私の思想史・事始め—狩野亨吉・中井正一・尾崎秀実ら」(3)
.....講師・鈴木 正
- 2.27. 〈知の歴史〉入門講座「ヘーゲル『精神現象学』と方法の問題」
.....講師・大田孝太郎
- 3.13. 〈知の歴史〉入門講座・ヘーゲル『精神現象学』を読む.....講師・田畑 稔
第13回「市民社会の実在論」
- 3.27. 〈知の歴史〉入門講座・ヘーゲル『精神現象学』を読む.....講師・田畑 稔
第14回「道徳法則の限界」
- 4.10. 〈知の歴史〉入門講座・ヘーゲル『精神現象学』を読む.....講師・田畑 稔
第15回「古代ギリシャの人倫社会」
- 4.24. 〈2010年開講講演〉
「〈ニューディール〉・デューイとオバマ」(1)講師・山本晴義
5. 8. 「〈ニューディール〉・デューイとオバマ」(2)講師・山本晴義
- 5.22. 「〈ニューディール〉・デューイとオバマ」(3)講師・山本晴義
- 6.12. 拡大運営委員会
- 7.31. 納涼・会員参加者交流会 ゲスト・三浦隆宏(哲学カフェ)
- 8.28～29.2010年夏期合宿(大阪唯研哲学部会、季報唯研刊行会と共催) 於・信貴山
シンポジウム「知識論の現在—日常知、技術知、科学知、哲学知」
報告者・田畑 稔・村山 章・三浦隆宏
研究発表1「売買春をめぐる最近の議論について」(平等文博)
研究発表2「世界をめぐるコーヒーとナマコ」(木村倫幸)
- 9.25. 「スコットランド留学から見てきたこと」.....講師・目賀田文字
- 10.23. 「小国アイルランドの昔と今:ナショナリズムとの苦闘—〈21世紀初頭世界恐慌〉
にも触れて」.....講師・本多三郎
- 11.27. 〈大阪の歴史と文化〉「森秀次と天皇主義」.....講師・北崎豊二

添田馨著『吉本隆明 論争のクロニクル』（響文社刊）を書評する

吉本論争にたどる「現在」認識と左翼思考

室伏 志畔（講師）

これは先年、詩集『語族』（思潮社刊）によって東京を歴史的身体として措定し、その重層する異界へ自在に往還し、その存在を鮮やかに印象づけた詩人・添田馨による、これは待望久しい戦後、数々の論争を潜り抜けた吉本隆明のクロニクルを編むことからする「現在」認識の解説ということになるのか。

「現在」というとりどりの一回性の論争舞台で連戦連勝を通したかに見えるこの吉本に対し、一昨年、その「負け組」の思想を踏まえ、『吉本隆明の時代』（作品社刊）をスガ秀美は上梓したが、今回、「勝ち組」にある添田が本書をまとめたことで、ようやく我々は戦後論争をその表裏から検討できるようになったと云えるかも知れない。

そこで添田は、論争こそ吉本思想の母体であったとする立場から、数ある論争の中から八つの論争を抽出し、吉本思想の「現在」論を跡づける。それを一通り追って見たい。

「文学者の戦争責任」にそれは始まるが、私には「前世代の詩人たち」が記憶に新しいが、吉本はそこで時々の風に乗って、戦時下では戦争協力を歌い、戦後はその自己を棚上げにして他者の戦争責任を問う左翼文学者の悲喜劇を剔抉して見せた。問題は吉本がその悲喜劇を、日本の近代的自我の内部矛盾としてある近代性と封建制の二律背反をそのままにしたところにあるとし、その自己矛盾を解決しない限り、時勢に振り回されるほかないと普遍化したところにあった。

続く第二章は「伝説の花田・吉本論争」であるが、この論争は戦後論争のベース・セッターを成し、かつて好村富士彦が『真昼の決

闘』（晶文社）を上梓し、その意義を早く論じたことが思い出される。それが如何に日本の現実の奥深い問題に相渡る論争としてあったかは、「一九五〇年代のヘゲモニー」論争とスガ秀美が総括したところに明らかである。添田はその意味をできるだけ明らかにせんと、その理念対立と両者の背景に言及せんとするものの難題であったかに見える。そこを添田は「プロレタリアートにたいして利益であったか、有害であったかに戦争責任の判断規準を設けなければならぬ」と花田清輝が紋切り型の啖呵を切って「前世代の詩人たち」に手を差し伸べたのを、吉本が、「こういう言辞によってかれら前衛的部分が、自己の戦後責任を横流しにしよう」とすることこそが問題なのだとして反論したところに、この論争が起こる必然があったとする。そこに戦前のプロレタリア文学以来の「政治の優位性論」を批判的に継承しつつ、「政治と文学」の二元論を引きずらざるをえなかった左翼文学者の限界は明らかであると、今、云うのはたやすい。しかし、戦後革命を「夢」見る左翼の空気の中でそれに抗し、「政治をみすえる眼と、文学をみすえる眼とは、内部において同一でなければならぬ」とした吉本理論のみずみずしさを、添田は、死と隣り合わせた吉本らの戦争体験が、社会ファシスト団体に寄生しながら偽装抵抗を説く花田の処世的な抗弁に比べ断然、迫力が違っていたのだ、と語る。

続く吉本の安保闘争体験は、武井昭夫の「層としての学生運動論」を踏まえ、労働者・大衆とともにその先頭にたつて闘う学生運動と共闘し、既成左翼政党を乗り越え突出した。しかし、その六〇年安保後を扱った第三章の「終焉」以

後の思想戦」は、かつて共に「文学者の戦争責任」を問い、学生運動に理論的根拠を与えた武井との論争で、花田論争の余韻を引きずりつつ戦前以来の「政治と文学」理論の破産宣告であったが、私には如何にソフト化しようと「新日本文学」等に見られる左翼組織論が、もはや時代遅れになったという印象が強い。この「古典左翼の枠組み」に対する吉本の論争の掉尾を飾ったのが、最も現実から遠い文学的实践を戦後、『死霊』を書き続けることで果たしながら、今、一方、「核兵器の危機を訴える文学者の声明」にたやすく現実加担するところがあった埴谷雄高との「埴谷・吉本論争」が第四章を構成する。この論争は八〇年代半ばの論争で、そのとき、埴谷七五歳、吉本六〇歳という年齢を添田は数えているが、それは埴谷にとって大きなハンディであったろう。しかし、吉本は容赦なくそれをソフト・スターリニズムへの加担でしかないとしたのは、それは七〇年代から一世風靡した鶴見俊輔や小田実のベ平連運動への批判でもあったことにある。その前提に、吉本は世界状況を、社会主義圏と資本主義圏の対立とする冷戦概念を排し、あらゆるたたかいは国家権力との対決なしにありえない以上、それらの運動は国家権力との直接対決をそらすとする批判があった。

それを吉本の自立概念から説明する添田は、吉本が「大衆というものが各時代時代のイデオログをかならず模倣する存在だという認識」に深く関わるとして自立概念を説明しているのは、なかなか卓抜な指摘と云えよう。なぜなら「戦争を称揚するイデオログが悪で、平和を称揚するイデオログが善であるというように大衆は受け取りやすいとしても」、それは「イデオロギーの模倣である限り、彼等は思想的に自立することができ」ないとするところに関わる。ここから左翼のプロパガンダ理論や現在マスコミ理論を展望するなら、彼等は大衆を善導するとして引き回し、遂に自立できない愚衆を育てていることに変わりはないのだ。

この吉本批判に対し、「すべての権力をソヴェトへ」の目標を掲げてロシア革命におけるクロンシュタットの反乱の意義を論じ埴谷が反論を書いたことはよく知られている。それは一九六九年の中ソ国境紛争に始まり、中国・ヴェトナム戦争、ヴェトナム・カンボジア戦争、ソ連のアフガニスタン侵攻、ポーランド「連帯」運動への弾圧が進行する「現在」に、埴谷の眼が注がれていたことを語るものだ。そこではクロンシュタットの反乱から学ぶことは少なからずあったろう。しかし、吉本の眼は、世界の主要矛盾は高度資本主義社会の内部矛盾に移行し、七〇年代前半を境に大衆消費社会に突入した日本の変容する現実に向けられ、埴谷のクロンシュタットの反乱をもってする反論は、もはや「現実」を読めなくなっている左翼的知識人の見本でしかなかったのである。その意味でこれは「文学者の戦争責任」の追及に始まった「左翼のイデオロギー」との論争に終焉を告げるものとして「埴谷・吉本論争の前半戦」は置かれている。

そこを折り返し点として、そこから派生したファッション雑誌に載った吉本への批判に始まった第五章の「埴谷・吉本論争 後半戦」は、七〇年代前半を機に、未知の高度大衆消費社会に突入したとする吉本の現在資本主義分析が論争を通じ展開されたことで、論争は異相を呈し深化する。

それについて、添田はコム・デ・ギャルソンの衣装に身に纏った吉本に、そのとき異和感を抱いたと正直に記しつつ、それをこうまとめる。《「コム・デ・ギャルソン」問題をきっかけにして語られた吉本隆明の「革命」理念は、資本主義の高度化による消費生活水準の相対的な上昇こそが、すなわち「革命」の進行度合いを表現するというのと同じであり、そこでは反体制であるかどうかは二義的な問題でしかなく、むしろ現体制内でさまざまに分化して現われるカルチャー、サブ・カルチャーの諸相のうちにこそそれは実体に沿った兆候を示すと理解しうる》

とした。

これは反体制組織を形成することで、資本主義体制を包囲し、社会主義革命を夢見る左翼理論と位相を異にする「革命」概念の提唱と云えよう。この埴谷・吉本論争の開始と前後して『マス・イメージ論』（福武書店刊）を上梓した吉本は、満を持して埴谷に標的を定めたことを知るのだ。それまで純文学に限っていた吉本隆明の批評がサブ・カルチャーの漫画にまで押し広げたとこに明らかなごとく、社会変化にこれは批評を対応させんと意図したものであった。その背景に吉本の娘二人、後に小説家として名を馳せる吉本ばななと漫画家・春野宵子を見なければなるまい。埴谷は子を成さぬことを当為とし、吉本が娘二人を成したのはまったくの偶然であったが、それが息子でなく時代に最も敏感な娘をもったことが、これほど大きなことであるかと思わざるをえない。それを踏まえての吉本の埴谷への回答である「重層的な非決定」について添田は、六〇年代のルイ・アルチュセールが社会主義「革命」を現実化するためには、様々な要件の重なりをもって「重層的決定」が望ましいとした哲学的考察を、反転させたところに吉本の新たな概念が生まれたとし、それを「ソビエト・ロシア型の社会主義「革命」理念の死滅後に、新たに未知の「革命」形態を模索するための思考の必須の様態として、きわめて逆説的な意味を背負わされることになった」と要約している。そこに社会主義「革命」理念に対する吉本隆明の決定的な不信と訣別を見ていいのだ。

そこから吉本は未来社会の可能性として、働きすぎの賃労働がなくなること、大衆の同意なしに動かせる軍隊や警察を持たないこと、国家が開かれていることの三つの条件を挙げ、最後の「国家が開かれていること」の実現手段として「リコール権」を取り上げ、超資本主義社会における可能性についての吉本理論を添田はこう要約する。

《「リコール」の手段が、そこでは何らかの政

治的手法としてではなく、経済的手法すなわち大衆の選択的な消費活動そのものとして捉え返されているのだ。国家財政の三分の一から二分の一が、個人消費、なかでも恣意的な選択消費、つまりそれがなくても生存条件にはならぬ影響しない消費活動によって賄われる超資本主義社会になれば、その部分の消費総額を一時的に抑制するという手段に出ることによって、一般大衆は容易に政府を財政面から打ち倒すことが可能になる、つまり「革命」が可能になるのだ、と》

吉本が「革命」の主要課題が、すでに先進資本主義体制の世界史的な「現在」と「未来」の在り方の問題に移ったとする以上、それ以後の吉本の論争が、これまでの左翼との論争から、より現代的な「現在」問題、三浦和義の「ロス疑惑」のマスコミ報道へオマージュした鮎川信夫との論争である第六章の「メディア時代の遍在する暴力」を経て、その先に麻原彰晃の評価を巡る第七章の「オウム真理教をめぐる論戦の波紋」論争へと進み、最後に、9.11事件以後の戦争論を巡る第八章の「国家と存在倫理」へと向かったのは必然であった。その締めくくりを吉本の日本国憲法の九条論を押さえる中で、添田は筆を擱いたことは、後半の埴谷・吉本論争が如何に時代の画期線を引くものとしてあったかに改めて思い至る。

この後半の埴谷・吉本論争を押さえ、『マス・イメージ論』から『ハイ・イメージ論』を深く読み進んだ者にとって、八〇年代の後半から九〇年代の初頭の東欧社会主義国の瓦解に始まるソ連邦の解体は、大きな事件であったとしても、ある既視感があるのは、それは吉本思想が批判、訣別した「旧い左翼的残骸」の再演でしかなかったことによる。

その上で、本書をスガ秀美の『吉本隆明の時代』と比較するとき、それが「六八年」論に焦点を合わず制約もあって、「普遍的知識人の誕生」をジッドからサルトルと小林秀雄から吉本隆明の違いを踏まえることに始め、五〇年代に花田清

輝を、六〇年安保で共産主義同盟と武井昭夫を、安保後の知識人に黒田寛一を拾い、「市民社会と大学の解体」に進歩的知識人代表に丸山真男を選び、岩田弘や廣末渉や津村喬を扱って「六八年へ」と至る論であったことを再確認するとき、その「古典左翼」的な枠組みへのこだわりから自由でないことを改めて知るのだ。それはどの時代にあっても「負け組」が自己の「負の枠組み」に固執せざるをえない特徴を鮮やかに示すものである。そのことを踏まえ、高度資本主義社会の優位性評価に発展した「埴谷・吉本論争 後半戦」を転機として、一切の左翼的枠組みと訣別し、そこから変容した「現在」に巨歩を進めた吉本隆明を再確認している添田の論は、「勝ち組」の枠組みが吉本思想と共にあったことを、また語るものである。

私は佐藤幹夫が主宰する「樹が陣営」で、添田馨が五章までの「埴谷・吉本論争の後半戦」を書き終えた頃に、本書の出版について相談を受けた。そのとき、高度資本主義の評価論争の意義から論を飛躍させ、「論争のクロニクル（編年史）」を裏切った「現在」論に飛躍させていいのではと云う意見を述べたことを思い出す。しかし、添田は愚直に（？）自己の軌道を修正することなく、次章の鮎川・吉本論争の「ロス疑惑」で筆を擱くことなく、さらに「オウム真理教」論争から「9.11事件」を論じ、九条論を掘り進み、より不気味な「現在」論をものすることになったことを、今は慶賀したい。

しかし、本書は論争を通しての吉本の「現在」論の枠組みを押し出すものとしてあるため、花田・吉本論争で花田と吉本がそれぞれに皇国的ファシストや、社会ファシスト団体に関係したと書いたことは反則行為であるとし、またオウム真理教事件で、吉本が麻原彰晃の宗教指導者としての能力を評価する余り、無差別殺人事件の首謀者としての弾劾が疎かにされていると添田は批判するものの、概して持論を抑制し、その展開を今後に残したかに見える。そうした中、

添田が、9.11事件以後の戦争論で同乗者を巻き込んだ無差別テロと同じ比重で、社会党が政権獲得のために「自衛隊合憲」を打ち出した豹変を批判している吉本の言を引いているのは、もっと注目されてよい。それは政権投げ出しやマニフェスト違反が倅いとなりつつあるこの国の政治状況を思うと、新宿事件における無差別殺人に見られる各地の頻発は、同じ病が形を変え育っていることを示し、不気味である。

最後に添田は吉本隆明の九条論を持ち出したことにはじめ違和感を覚えたものの、「これで戦争のモトが取れたのだ」とする吉本隆明に大きく頷く。日本国憲法九条は、アメリカの日本国の武装解除政策と不戦の理想の微妙な妥協の内に成ったことは明らかで、その占領政策にだけ目が行くなら江藤淳の論を結果し、不戦の理想だけをそこに見るならかつての社会党から現在の社民党の見解が生じるのは当然である。しかし、それが現在まで保持されたことで、半世紀以上にわたり無益な戦争犠牲者を生まなかったばかりか、ここに至る戦後の復興と繁栄の礎としてあったことは明らかである。様々な思惑が絡んで成立した九条を、その結果論からだけ見直すとき、ますますそれを疎かに取り扱ってはならないことはすでに明らかである。それをテロ国家や北朝鮮の核武装に対する有効な手が打てないといった目先の議論でその存廃を論じられてはたまったものではないのだ。そこで政府への国民の「リコール権」が試されようという、吉本の言葉は重い。

その言葉の確かさによって、既成の左翼的言質からマスコミ言語にある虚偽性を排して、我々があるところ「現在」を誰よりも深く開示した吉本に投棄した者によって、花田・吉本論争後、花田本が古本屋に叩き売られる現象が生まれたように、この吉本の高度資本主義社会の「現在」評価に疑問を呈し、吉本本を叩きうる編集者が出たこともまた事実で、世間の明日にどんな風が吹くかは、我々の予想の外にあることもまた

確かなのだ。そのとき、「勝ち組」の思想が、吉本抜きで揺らがないという保障もまたないのだ。私は吉本の「現在」認識の優位性を認めるにやぶさかではないが、花田・吉本論争についてかつて「その帰結が吉本の勝利に帰したという風な消息通たちの判断を信じることができない」とした谷川雁流に嘯きたい気持ちがないでもない。というのは、吉本理論の先に花田の「偽装の自覚」を対象化することなしに、「ミイケを越えて」大正炭鉱論争が突出することがなかったことを知るからだ。世界が理論によって鮮明にされることがあっても、一理論によって世界は凌駕されることはないのだ。

「勝ち組」は八世紀の日本国成立以来、この国の〈知〉が太安萬侶を筆頭に、権力に屈服・転向する中で生き延びるほかなかったことを忘れてる。近代史における「勝ち組」は、この「負け組」の「勝ち組」でしかないことへの自覚がないため、戦後史学の「神話と歴史」理論に易々と乗っており、たとえ疑っても、たかだか天皇家の原郷を南九州に置き、畿内大和へ神武を東征させた記紀史観の罫にはまっており、吉本隆明もその後者の例外でないのだ。彼等は複製として畿内大和の中での歴史をまだ夢想しており、天皇家の原郷を南九州に置き、その原大和を隠しとしてあった記紀史観の詐術があることすら気づかず、偽大和の畿内大和を担っているのだ。そのため、吉本理論を取り込んだ亜流は「複製としての〈知〉」にたやすく接続し、今日、多くの大学や研究所の席にたやすくありつき、それを忌避し生きてきた吉本思想を忘れてる。それら大学関係者によって書かれる吉本隆明論がこの頃とみに「負け組」以下の論を量産している自覚さえない。そこでは「負け組」が「左翼の枠組み」にこだわるために屈折しているとはいえ、遠い昔のそうした転向知識人がそれにこだわることによって、天皇制に対する「先行した枠組み」が曲がりなりに伝承されてきたように、花田清輝の内にある「偽装の自覚」さえ見


ずに、「勝ち組」は自ら吉本が果たしてきた労を自ら取ることなく、ただ吉本に倣い排するだけでは、決して克服したとは云えない逆説に今あることを云っておきたいと思う。

ところで、私はこの半世紀の戦後の論争を勝ち抜くことによって、我々に新たなパラダイムを拓いてきた吉本隆明とは別に、この四〇年近く、学問的論戦にことごとく勝利を納めながら、世間的に葬られてきた古田武彦の論戦のあり方の相違を押さえることなしに、古代史への批評的介入に踏み切れなかったことを、ここに付記しておきたい。

その上で、忘れずに本書の装丁に惹かれるものがあつたことを記すと共に、本書のもの足らなさについて云わして貰うなら、論争のエネルギーを支えたであろうエロス論がここには欠けているように思えた。花田・吉本論争の折り、吉本は他者の妻を我がものとし鼻息荒かったなら、このとき、花田は女と別れ、「夏炉冬扇」ごとき状態で、戦いを買って出るほかなかったことを小川徹はかつて発掘した。とするなら、そのボルテージ差は明らかである。それへの一切の顧慮を欠いた批評は、吉本が鮎川信夫をずっと独り者と思っていたが、死後、世話する女性が現れたことに驚く感想を寄せているのを、私は興味深く読んだが、吉本批評の現在における優位性を確認しつつも、女という怪物は、理屈で片づかない加担を男に強いもし、排しもするところに、血の継続する歴史が営まれたなら、歴史を狂わせてもきたのだ。そのエロス論への配慮を欠いた「現在」論は、いささか女を欠いた世界同様にもの足らなく見えるのだが、どうだろう。(2010.07.04)

《付記》

ところで、私はこの半世紀の戦後論争を勝ち抜くことによって、我々に新たなパラダイムを拓いてきた吉本隆明とは別に、この四〇年近く、学問的論戦にことごとく勝利を納めながら、世

間的に葬られてきた古田武彦の論戦のあり方の相違を押さえることなしに、古代史への批評的介入に踏み切れなかったことについて少しく記しておきたいと思う。古田武彦とは大和朝廷に先在する九州王朝説をもって、七、八〇年代に一世風靡したことで知られる。邪馬台国を邪馬壹国であると論証し、「魏志倭人伝」は長里ではなくその六分の一の魏晋朝短里で書かれているとし、当時の年齢は二倍年暦によるとし、倭人は半年で南アメリカの黒齒国や裸國に行き着くことを知っていたと、我々の古代史の常識を塗り替えてきた。そして倭国は、「前二世紀から七世紀まで」委奴国→邪馬壹国→(倭の五王)→国と連続した九州王朝であったとし、大和朝廷一元史観を出る王権論の可能性を開いたことで知られる。

しかし、これら論証の勝利に関わらず、学界の流れは変わらず、学界から無視される中で、たまたま持ち上がった『東日流外三郡誌』を偽書とするマスコミのキャンペーンの中で急速に影響力を失い、昨今はそれを偽書とする本が早稲田ジャーナリズム大賞を取るという亜気流の中に今も置かれている。

私は、その偽書キャンペーンを九州王朝説潰しの策動と批判する中で、古代史への批評的介入をはじめたのは、九州王朝説が天皇制の枠組みを越えるに足る文献論証であったことによる。しかし、私は古田武彦の『東日流外三郡誌』を巡っての論戦が、マスコミを舞台に仕掛けられたのにかうかか乗ったため、情報戦略で一枚上の安本美典の論争術に遅れを取り、九州王朝説ばかりか、その支持母体であった「市民の古代研究会」の造反にも対処できない姿を目の当たりにすることになった。

『東日流外三郡誌』とは、秋田藩の蝦夷の豪族・阿倍・安東氏が日向の賊・神武に追われた長髓彦の末裔とする伝承を伝えるもので、江戸の寛政時代に秋田孝季が全国を回って集めた古文書の膨大な再写文書で、全四千巻近くに及ぶとさ

れる。その基調は大和朝廷に先在したヤマトの長髓彦王権を主張する反天皇制の書で、記紀文献と齟齬する貴重な史料としてある。

皇室批判をタブーとするマスコミ体質を利用して、この論争を学問的にするのではなくマスコミ論戦にもちこみ、裁判沙汰のスクandal論争を煽ったところに安本美典の勝利の秘密があった。それは『東日流外三郡誌』の中身を検討することなく、それを所持した和田喜八郎の怪しげな手つきを告発することで、これを葬ったところに明らかである。それは江戸時代に『先代旧事本紀』をその序文の執筆者と成立時期の矛盾だけをついて、中身を研究することなく偽書として葬ったが、それは文献史料の本質的批判に入る前に、その研究を玄関払いするに似ている。

かくして、今も我々は記紀の畿内一元史観の呪縛に置かれ、内外文献の齟齬は記紀を初めとする国内史料を優先するという、天皇制の意向を尊重する、学問とは云えないスコラ学を強制されている。

神武に先行し原大和である倭(やまと)に降臨した饒速日命について、私はその別名を猿田彦とし、記紀が記載する長髓彦をその流れにあったとしてきた。「姓氏ランキング」で検索すると、猿田氏のトップ居住地は秋田県で、右隣の岩手県が熊襲の雄・菊池氏のトップ居住地であることを知る。しかも、そこに偽書の呼び声高い『東日流外三郡誌』と、遠い倭人の心のふるさとを伝える『遠野物語』が拾遺されたというアンビヴァレンツな並存ほど、朝敵・蝦夷とは何であったかを、今に語るものはなからう。

古田武彦の学問的論証に関わらず、その世間的な無視は、この国の〈知〉の在り方をよく示すもので、天皇制の温床となった畿内一元史観に九州王朝説のどう文句をつけようと、学界から締め出し、皇室批判をタブーとするマスコミを利用して、偽書弾劾にたやすく乗った大衆の正義感を利用して古田武彦を潰し、九州王朝説

に偽説の烙印を押すことに成功したのは、朝敵潰しの方法と同じである。

これに対し、古田武彦は反論するものの、反天皇制としての九州王朝説の共同幻想を深めることは、ますますマスコミと敵対する矛盾を泥沼化させずにはおかない。そのため、古田武彦は倭国の起源についての研究を、皇統本源の天孫族に降臨に始まるとするに留め、それ以上に遡行させないことになった。それは倭国大神（主神）を天照大神とし、大和朝廷の主神に同値させるもので、倭国に皇衣を纏わせる九州王朝説を成すこととなった。のみならず、その傍流の神武東征に大和朝廷は始まると記紀史観に接続させたことで、ますます九州王朝の旗を自ら色褪せさせたものにしてしまった。別言すれば、それは一国王権論に古田武彦をますます誘い、倭人の由来を長江下流で集団稲作を営んだ呉越の民に遡行させた研究を無視し、通説と同じく多くの漢籍にある「倭は呉の太伯の後」とする南船系王権への言及を避けたばかりか、韓半島で雄飛した北方騎馬民族王権の列島への侵攻につ

いても眼をつぶったため、その九州王朝説は東アジア民族移動のエネルギーを自ら疎外し、その起源論を皇統一系の中に今や隔離されるに至っている。

この古田武彦の頓挫は、自説の内に九州王朝説を限る原理主義的組織論と相まって、今や九州王朝説の新たな胎動の芽をことごとく摘むまでに至っている。

論争は一見、論証の正しさを競うものに見えるが、それだけに限られるものでなく、「現在」の核心部分への切り込みを通してのパラダイムの転換を勝ち取ることなく、勝利はありえないことを吉本の論争は教えてきた。我々の内にあるイドラ（偏見）の除去に向かつてのパラダイムの転換は、その根を支える組織体の解体に至らしめる致命的な言説を吉本は論争を通じて構築していたことを知るのだ。天皇制の温床としてある大学や学界に通じる思想をもってするような九州王朝説では、論証に勝っても世間にはかなわず、引かれ者の小唄を唄うほかないのではなかろうか。



※会員の松尾猛省さんからいただいた年賀状です

